

藤並の森

Vol. 40



▲牛窓にて(ふくやま文学館 提供)

リレー随筆

作家を支えた土佐人の酒と情

前田 貞昭
まえだ さだあき

井伏鱒二は、二人の先輩作家から、全く違う酒の飲み方を見せられた。一人は、井伏文学を激賞した牧野信一であり、もう一人は井伏の飲みっぷりを認めた田中貢太郎である。二人とも、井伏の文学生活を語るのに欠かせない先輩作家だが、その酒は違う。牧野(小田原の人である)が示したのは、人を罵倒し、いじめる酒。酒席も人間修行・文学修行と心得てか、ある時、牧野は、とことん、井伏をやっつけたらしい。身の置き所がなくなった井伏は、悔し涙を流して逃げ帰ったと、随筆に書いている。

他方、田中の酒席はずいぶんと愉快だったという。田中は、酒を介して人と交わり、酒も人も大切にする。井伏が初めて田中を訪問した時、飲みっぷりがいいと褒められ、以来、出入を許される。酒豪・田中らしい人間鑑定だ。なにせ、田中は、大町桂月の文学碑に詣でると、まず「やあ、先生、私は丈夫でやつちりますきに、安心してください」と挨拶し、やがて、持参した一升瓶の酒を大事そうに台石にこぼしながら、自分

も手酌で飲んだという程の酒好きである。井伏は田中の同郷人でもないし、深い縁故があるわけでもない。が、田中は、自分が選者であった懸賞小説に応募させて二等賞金を与えたり、当時まだ十五歳だった節代夫人との仲人も引受けている。ほかに、田中が井伏のために作品発表舞台を設けた形跡が、近年だいぶ確認されてきている。

なるほど、雑誌や新聞で井伏作品を褒めて文壇に引き上げたのは、牧野信一であり、小林秀雄であった(二人とも、相手をいじめる酒癖の持ち主だ)。が、文壇に押し上げるべく、その苦しい文学生活を陰で支えたのは田中であつた(田中との酒席が井伏を慰めたことは言うまでもあるまいが……。田中は井伏文学を評する言葉も、井伏との関係を子細に明かす文章も残してはない。だから、なおのこと、私には、土佐人・田中貢太郎の篤い情が井伏を育てたことを強調しておきたい気持ちがある。

(兵庫教育大学大学院教授・日本近代文学)

「井伏鱒二と中・四国路」展

5月25日(日)
企画展示室
観覧料500円

にまとめました。そして、作品からの抜粋文と写真パネル、井伏の写生画などでその土地の様子をご覧いただきます。井伏の文章により中・四国を旅する気分でお楽しみください。また、直筆原稿や雑誌、書物などの関連資料も展示いたします。名作との評判を得ていた作品でさえ改稿しようとした井伏の原稿には何度も手を入れた跡があり、妥協を許さない作家の姿勢を感じていただけることでしょう。

展覧会 紹介

「井伏鱒二と中・四国路」展

平成20年
4月13日(日)

5月25日(日)
企画展示室
観覧料500円

田中貢太郎とのきずな

同人雑誌《博浪沙》を主宰し、多くの後進を育てた高知県出身作家・田中貢太郎は、無名の文学青年であった井伏鱒二を温かく見守った人物です。

井伏が田中貢太郎の元を訪ねたのは、大正十二(一九二三)年、二五歳の頃でした。田中は自らの主宰する《桂月》や《博浪沙》に井伏の作品を掲載、佐藤春夫を紹介し、井伏を文壇に押し出す道筋を作りました。井伏も結婚に際しては仲人を頼むほど、公私ともに慕う師となりました。

井伏鱒二は《博浪沙》同人による二度の土佐旅行に参加して高知県を訪れました。また、昭和十五(一九四〇)年には胃潰瘍で吐血した田中貢太郎を見舞うため来高し、この時に「へんろう



▲《博浪沙》同人寄せ書き(掛軸)／当館所蔵

宿」を執筆しています。作品にも「土佐もの」と言える一群があり、直木賞を受賞したのが『ジョン万次郎漂流記』であったことにも縁を感じます。

当館資料には《博浪沙》の同人による寄せ書きの軸があり、田中貢太郎と井伏鱒二がそろって署名しています。また、井伏に宛てた田中の書簡も残されており、近況を知らせたり原稿依頼をする内容から、二人の温かい師弟関係が伺えます。ご来館をお待ちしております。

(学芸課／間城彩佳)



▲井伏鱒二宛田中貢太郎書簡／当館所蔵

◆「井伏鱒二と中・四国路」展関連企画のご案内◆

■記念講演会開催!!

開催日：平成20年4月20日(日) 午後2時～3時30分

場 所：文学館1階ホール 定 員：100名

演 題：「井伏鱒二の土佐への旅―《博浪沙》招待旅行と井伏紀行文―」

講 師：前田 貞昭氏(兵庫教育大学大学院教授)

『井伏鱒二全集』(編集・解題)を担当した作品研究・著作調査の第一人者による講演です。

参加料：当日観覧券が必要です。(但し、2割引)(事前に電話でお申し込みください)

■朗読の会「井伏鱒二を読む」(仮)

開催日：平成20年4月19日(土) 午後2時～4時

場 所：文学館1階ホール

参加料：無料(当日、会場に直接お越しください。)

※文学館カルチャーサポーターのみなさんによる朗読です。

■「巨匠にチャレンジ!」鱒二クイズ

☆正解数にあわせて、すてきなプレゼントがあります。

開催日：平成20年5月3日(土)～6日(火) ※4日間いつでも参加できます。 場 所：文学館企画展示室

参加料：当日観覧券が必要です。(当日、会場に直接お越しください。)

※当日観覧者を対象とした楽しいクイズを開催いたします。正解数にあわせて賞品をプレゼント!巨匠にチャレンジしてみよう!

■「鱒二の釣り日和(びより)」

開催日：企画展開催期間中、いつでも参加できます。 場 所：文学館企画展示室

参加料：当日観覧券が必要です。

※釣りが好きだった井伏鱒二にちなんで、文学館企画展示室内に、釣り堀を模したコーナーを作ります!

マグネットを使って上手に釣りを楽しもう♪

☆展示解説

日時：平成20年4月13日(日)・19日(土)・26日(土)、5月3日(土)・10日(土)・17日(土)・24日(土)・25日(日)

各日とも午後1時30分～(30分程度)

企画展担当者が展示解説を行います。(要観覧券)

天璋院篤姫と 宮尾文学展

1月2日(水)から3月9日(日)まで開催の「天璋院篤姫と宮尾文学」展は、好評のうちに無事終了しました。

展覧会では、宮尾さんより寄贈いただいた「天璋院篤姫」の直筆原稿など、貴重な資料で「篤姫」の魅力に迫るとともに、豪華な関連企画も開催いたしました。

2月3日(土)、文学館では、講師に鹿児島大学法文学部教授で、生涯学習教育研究センター長の原口泉さんをお迎えし「天璋院篤姫と宮尾文学」展の記念講演会を開催しました。

演題は、「篤姫の生き方―土佐と薩摩」。原口さんは、NHK大河



▲講演会の様子

ドラマの時代考証をされており、高知でも人気が高く、当日、キャンセル待ちのお客様が列をなす程の盛況でした。

講演では、「天璋院篤姫」における宮尾文学の素晴らしさや、19歳で徳川家に嫁ぎ、江戸城無血開城に力を尽くした生粋の薩摩おごじよ「篤姫」について、また大河ドラマ撮影の際のエピソードなど、広くお話しくださいました。中でも、実際には西郷隆盛の手元には届かなかったようですが、江戸城総攻撃の日が慶応4年3月15日と決まり、一刻の猶予もない中、天璋院が西郷隆盛に宛て「私方一命にかけ」と書いた無血開城に向けての必死



▲舞楽～胡蝶

の嘆願書には、胸を打たれた方が多く、また、参加者は、原口さんの軽妙な語り口に笑いあり、涙あり、充実した時間を過ごされていました。その後、サイン会がおこなわれ、多くの皆さんが著作本『篤姫』を買い求めていました。また、2月17日(日)、繁藤雅陽会と南国雅龍会のみなさんによる雅楽の公演が行われました。雅楽を聴くのは初めてという方のために、雅楽由来の言葉や楽器の説明もあり、参加者は演奏や舞とともに雅の世界を堪能されていました。

(学芸課/津田加須子)

館長室から

「新しい1年に向けて」

溝淵 良一

館長として1年を一通り何とかこなし、4月から新しい1年のスタートをむかえます。1年を振り返ると、まず常設展示のリニューアル。内容をどう盛り込んでいくか、予定の期日に作業が間に合うかなど、網わたりの状況もありましたが、「変化する常設」というコンセプトで思い切った改装をしました。展覧会事業はほぼ計画通りに行い、目標を達成することができましたし、教育・普及事業も新しい取り組みを含め、かなり盛りだくさんに実施することができたと思います。

こうした中で、あしたたら良かった、こうした良かった、と思うこともたくさんありますが、中でも一つあげると、文学館の事業に参加していただく年齢層の幅をもっと広めていかなければという思いです。文学館を支えていただいているのは、どちらかというと年齢的には高い層の方たちです。この「顧客層」へのサービスは引き続き充実していくことがベースとなりますが、現状では文学館の利用が主に県民であることを考えると、限られた県人口の中、もっと若い年齢層への働きかけが大事だと思います。

こんな思いから、新年度からは若い年齢層への取り組みを強化していこうと思います。具体的には、児童生徒や若い年齢層向けの展覧会を充実するとともに、教育・普及事業も少しイベント的な色づけを増やしたいと思います。夏休みや春休み、秋の遠足シーズンを意識した取り組み、また、学校現場に出向くことをもっと増やしていきたいと思っています。何はともあれ、より多くの県民の皆さんに満足していただくことができるよう、自己変革をしていく文学館を目指して、この1年、職員一同がんばります。

基石一握りほどの集落——田中英光父のふるさと——

猪野 睦

作家のふるさとへの思いは強い。それが父母のうまれたところであり、生涯に一度か二度しか尋ねたことのないところであれば、なおさら思いは深いのかも知れない。

田中英光が父岩崎鏡川のふるさと土佐山莚浦を尋ねたのは昭和十年五月、徴兵検査で高知へ現在のソウル、京城から帰ってきたときだった。このときのことを田中英光は「桜」と題して昭和十七年「文芸」九月号にかいた。評判のいい小説で翌年の「日本代表作選集」に収録された。いまでは莚浦へは、車で高知市を一望できる正蓮寺へのぼり、そこから谷川に沿って下る。

その谷川が高知市、北山の裏の鏡川本流に合流する場所から上流へゆくと、西川、莚浦集落につく。そこが田中英光の父の出身地だった。

英光が行った莚浦は遠かった。歩くしかない時代で、下駄ばき尻からげの叔父の案内で三つの峰をこえ、五時間かかった。峠からは下り坂

▲山峡土佐山の耕地

になると鏡川が光って見えたところから、薊野から山道を登り重倉、入定を抜けたのだったか。

その川の彼方には「基石、一握りほどの集落」があり、「盤上から石を握って離れたほどの散らばり方で散在して」おり、その人家の間から田畑は青いしみのように拡がり、山裾といわず山腹といわず至る処に食いこんでいると当時の光景をかいいた。五月初夏の田植のすんだ水田が、点在する藁屋根の周辺に光って見えたのだたろう。

父は若い頃、繭を売りに高知市へでて、そっくり売上金をもって上京した。父は父なりに成功するが、山で家を守る一族には顔むけできない所業だった。一族には病人がでたり、田畑を売り自殺したりの不幸もつづくが、けなげに残った者で家は守られていく。庭先にはウロをもつ桜の巨木があり、半分は枯れ半分は家の上に葉を茂らせている。その桜とともに一族の年月をかきあげたのが「桜」だった。今読み返しても名作である。

田中英光は戦後は、共産党地区委員長になったり、すぐれた「N機関区」や「少女」のような作品をかくが、やがてアドルフと酒におぼれる破滅型の無頼派を地でゆく暮しのなかで作品をかきついだ。そして太宰治の墓前で自殺した。三十六歳だった。全集十巻が残ったが、それだけに「桜」はいいらしい。

(詩人)

資料受贈報告

——最近の寄贈資料から——

『幸徳秋水と小泉三申——叛骨の友情譜』

鍋島高明著 高知新聞社
二〇〇七年九月 B6版 二八五頁



著者の鍋島高明さんは一九三六(昭和十一年)長岡郡介良村(高知市介良)生まれ。早稲田大学政経学部卒業後日本経済新聞社に入社。編集局商品部次長、編集委員などを歴任。日経産業消費研究所、日経総合販売取締役を経て市場経済研究所を設立し現在代表取締役を務めています。またこれまでに『ニッポン相場師列伝』『相場師秘聞』『相場ヒーロー伝説』『賭けた儲けた 生きた』『ヘタな経済書より名作に学べる金と相場』『相場師奇聞』ほか多数の著書を出版しています。

このたびの『幸徳秋水と小泉三申——叛骨の友情譜』は、二〇〇七年三月七日から五月二十九日まで七一回に亘り高知新聞に連載された同名の作品に「恩師「木戸明」という奇傑」など四項目を新たに加えるとともに連載の内容にも一部

受贈報告(平成十九年十一月〜平成二十年一月) 敬称略

▼山本衛・「山本衛詩集「讀河」」 山本衛著 コー
ルサク社」▼森下時男・「探偵小説の父 森下雨
村 森下時男著 文源社」▼小松弘愛・「詩と思想・
詩人集二〇〇七年 詩と思想編集委員会編 土
陽美術社」他▼竹内義之・「詩集」野に咲く花 竹
内義之著 文藝社」▼鍋島高明・「幸徳秋水と小泉
三申——叛骨の友情譜」 鍋島高明著 高知新聞社」
▼春野町教育委員会・「春野町史料第一集 地誌
春野町立郷土資料館編刊」他▼福井まゆみ・「歌
集」フランス組曲 福井まゆみ著 本阿弥書店」
▼竹本義明・「東福門院和子の涙 宮尾登美子著
講談社」▼矢野和文・「土佐弁の基礎知識 一の
瀬愚著・おろか工房編 高知ビデオサービス」
▼細川光洋・「寅彦をよむ 細川光洋著 心伎発
行所」▼高山ゆき・「句集」雪 高山ゆき著 壺
發行所」▼宮村昭男・「句集」石の島 宮村昭男
著 壺發行所」▼三上啓美・「歌集」瀧櫻 岡崎
ふゆ子著 放水路短歌会」他

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料
をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

加筆、修正を行い上梓されました。

小泉三申は秋水より一歳年下で、一八七二(明治五)年十一月、小泉定次郎・みねの長男として静岡岡県加茂郡三浜村(南伊豆町子浦)に生まれま
した。本名策太郎。新聞界に志を抱き地元の「静岡日報」を経て一八九四年板垣退助の「自由新聞」に入社。そこで一年早く入社していた秋水と知り
合うことになりました。二人は意気投合し、以来秋水が刑死するまで十七年にわたって「刎頸「断金」
とも形容される深い交わりが続きしました。三申は新聞記者から相場師、実業家として成功し更に政
界へ進出、文人政治家として活躍します。

本書は周辺関係者を含む幅広い視点から二人の交友関係を描き、読み応えのある一書となっています。

瀬戸内寂聴展

人と文学の軌跡を辿るゝに寄せて

高知県立文学館では、平成20年6月7日(土)～7月6日(日)まで、「瀬戸内寂聴展 人と文学の軌跡を辿るゝ」を開催します。

瀬戸内寂聴さんは、平成18年11月に文化勲章を受章し、その際「生きることは愛すること。世の中をよくするとか戦争をしないとか、その根柢には愛がある。それを書くのが小説だと思う」と語っています。情熱を内に秘め、魂の叫びに従って生き、ひたすら小説を書き続けた50余年。切に生きることを自らに厳しく課す一方、情熱あふれる豊かな言葉で、今日多くの人がとに生きる喜びを伝えていきます。しかし、その作家生活は、順風満帆とは言い難い

▲瀬戸内寂聴さん／徳島県立文学書道館提供



ものでした。少女小説からスタートし、昭和30年「痛い靴」で作家としてデビューしますが、初期の頃には、作品が誤解されたり、時代に受け入れられず、苦悩の日々をおくられました。そんな中、支えとなったのは、才能を認め、励ましてくれた作家仲間や編集者、評論家の人びとでした。瀬戸内さんは、苦難を乗り越え、次々と新たな境地を開いて行きます。とくに、40代になるとあらゆるジャンルに取り組み、寝る間も惜しんで執筆。多くの読者を獲得されました。やがて、「自ら書いたものにうながされるように」出家得度し、僧侶となり、より集中し執筆され、近年では、「源氏物語」の現代語訳、「釈迦」といった大作を生みだしています。平成18年、女性作家として、4人目となる文化勲章を受章。平成19年5月、世阿弥をテーマに「秘花」を上梓されています。今回の展覧会では、徳島県立文学書道館のご協力をいただき、「夏の終わり」から最新作「秘花」までの代表作の紹介や、親交のあった三島由紀夫や円地文子、吉行淳之介といった作家や批評家の書簡を展示し、瀬戸内寂聴さんの人と文学の軌跡を辿ります。是非、ご覧ください。

(学芸課／津田加須子)

☆展示構成

第1部

寂聴の作品―「夏の終わり」・「秘花」作家の書簡とともに(三島由紀夫、円地文子、吉行淳之介他)

第2部

寂聴 写真で辿る人生の軌跡

☆主な出展資料(予定)

原稿「夏の終わり」他、書簡「三島由紀夫」「円地文子」「吉行淳之介」、色紙、雑誌、

初版本、寂聴さん写真など、約60点

☆関連企画

①瀬戸内寂聴さんのビデオ上映と展示解説

日時 6月15日(日) 午後2時

場所 高知県立文学館1Fホール

解説 徳島県立文学書道館 専門職員 竹内紀子氏

②朗読の会

日時 6月21日(土) 午後2時

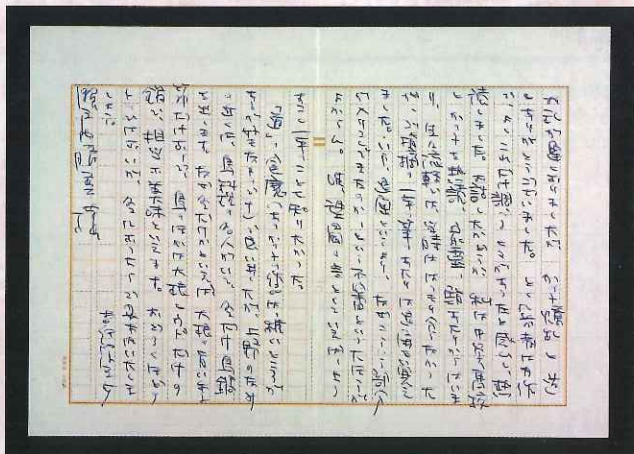
場所 高知県立文学館1Fホール

朗読 文学館カルチャーサポーターのみなさん

③企画展担当学芸員による展示解説

6月7日(土)・14日(土)・21日(土)・28日(土)、

7月5日(土) 各日とも午後1時30分～(30分程度)



▲吉行淳之介書簡／徳島県立文学書道館提供

企画展
案内

本山から 紙しばいがやってきた!

平成 4月1日(火)～
20年 4月13日(日)まで
(※会期中 休館日なし)

- ◆会場/高知県立文学館 1Fホール ◆観覧料/無料(常設展観覧の場合は別途必要)
◆開館時間/午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

平成15年に本山小学校で昭和20～40年代のなつかしい紙芝居600巻あまりが見つかりました。この、なつかしく貴重な紙芝居をより多くの子どもたちに楽しんでもらうため、春休み企画としてご紹介します。会場には、本山小学校からお借りした紙芝居を展示。親子で実演するなど、手にとってお楽しみください。

「井伏鱒二と中・四国路」展

平成 4月13日(日)～
20年 5月25日(日)まで
(※会期中 休館日なし)

- ◆会場/高知県立文学館 2F企画展示室 ◆観覧料/一般500円(常設展含む)
◆開館時間/午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

直木賞作家・井伏鱒二は中・四国全域にわたって多くの足跡を残しています。各県ごとに、井伏の残した文章からその土地の特色をしめすものを抜粋し、関連する原稿、雑誌、書物、写真などの資料を展示。また、高知県出身で同人誌「博浪沙」を主宰した田中貢太郎は井伏鱒二が慕った人物です。井伏を育てた田中貢太郎との親交についてもご覧いただけます。

その他、記念講演会やクイズなど、楽しい関連イベントを予定しています!
詳細は2・3ページをご覧ください。



牛窓にて/ふくやま文学館提供

瀬戸内寂聴展 ～人と文学の軌跡を辿る～

平成 6月7日(土)～
20年 7月6日(日)まで
(※会期中 休館日なし)

- ◆会場/高知県立文学館 2F企画展示室 ◆観覧料/一般350円(常設展含む)
◆開館時間/午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

平成18年、文化勲章を受賞した瀬戸内寂聴さんは、50余年にわたり切に生きることを自らに厳しく課す一方、情熱あふれる豊かな言葉で、多くの人に生きる喜びを伝えて来ました。今回の展覧会では、「夏の終わり」から最新作「秘花」までの代表作の紹介や親交のあった作家や批評家の書簡を展示し、瀬戸内寂聴さんの人と文学の軌跡を辿ります。

詳細は前ページをご覧ください。



瀬戸内寂聴さん/徳島県立文学館提供

イベント
案内

みんなあつまれ!
高知県立文学館
おはなしキャラバン
毎月第1土曜日開催中!

文学館では、「こどものぶんがく室」で、毎月第1土曜日に、楽しいおはなし会を開催しています!! 土佐の民話を中心にした紙芝居・読み聞かせ・クイズなどで、楽しい時間を過ごしませんか?

学校への出前公演なども受付中です!!

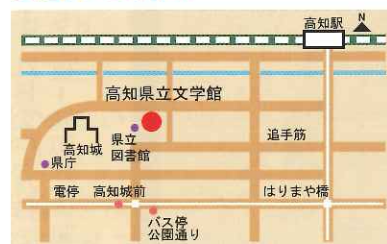
場所: 文学館 1階 みんなあつまれ! こどものぶんがく室
時間: 午後2時～(30分ほど)

入場: 無料

利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)
休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
観覧料 一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
駐車場 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
附帯設備
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857E-mail: bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/